生の座右の銘

生の座右の銘

朝鮮民主主義人民共和国
外国文出版社
チュチェ107(2018)

はじめに

朝鮮人民の偉大な領袖金日成（キムイルソン）主席の回顧録『世紀とともに』が世に出て数十年の歳月が流れた。しかし、希世の偉人の回顧録は、深遠な思想と豊かな内容、珠玉の文章、大きな感化力により世界の革命的人民の間で引き続き大きな反響を呼んでいる。

金日成主席の回顧録は、革命運動に携わる人々に革命の原理と人生の真理を悟らせ、生と闘争において指針とすべき座右の銘を与える貴重な教科書である。

主席は回顧録で、人民を信頼し、人民に依拠するときは天下を得て百戦百勝するが、人民をないがしろにし、彼らに見捨てられたときは百戦百敗するという真理、生と闘争の教訓を後世に残すことになれば幸いである、と述べている。

本社編集部は、自主と正義を志向する進歩的人民の熱望に応えて、金日成主席の回顧録『世紀とともに』から抜粋した名言を収録した名言集『生の座右の銘』を発行する。

目　　次

1．祖国と革命

「国が滅びれば、山河も人間も決して安らかでありえない。滅んだ国の屋根の下では、国を売り渡した代価としてぜいたく三昧に暮らす売国奴も安らかに眠れないものだ。人間は生きていても喪家の狗にも劣り、山河は境界が残っていても本来の姿を保つのがむずかしいのである。このような道理を先に悟った人を先覚者といい、臥薪嘗胆して国に垂れこめた暗雲を払おうと努める人を愛国者といい、おのれの体を燃やして真理を明らかにし、万民を奮い起こして不正義の世の中をくつがえす人を革命家という」

「父は故郷を発つ前に『南山の青松』という詩を残した。それは、体が引き裂かれ粉になろうとも代をついで屈せずにたたかい、三千里錦繍江山に独立の新春をもたらそうという父の誓いを詠んだものである」

「歴史には強大国が小国に同情し、弱小国の人民

に自由と独立をプレゼントした前例などない。民族の自主権はもっぱらその民族自身の主体的な努力と不屈の闘争によってのみ保全し、獲得することができるのである。これは世紀と世代をへて、歴史によって検証された真理である」

「3·1人民蜂起は、人民大衆が民族の独立と自由をめざすたたかいで勝利するには、必ず革命的な党の指導のもとに正しい戦略戦術をもち、闘争を組織的におし進め、事大主義を徹底的に排撃し、自己の革命勢力をしっかり準備しなければならないという深刻な教訓を残した」

「人間が一生を生きるあいだには、いろいろな悲しみにぶつかるものだ。しかし、それらの悲しみのなかでも最大の悲しみは亡国の悲しみであり、亡国の民となって祖国を離れる悲しみである」

[革命は少数の特殊な人間だけがするものではない。真理に目覚め、よい影響をうけていれば、誰でも世界を改造し変革する革命闘争で目を見張るよ

うな偉勲を立てることができるものである」

「祖国のために泣き、笑い、血を流し、全身全霊をささげた人だけが、祖国の真の貴さを知ることができるのである」

「真に祖国を愛し、民族を愛する人は、地球上のどこにいても、先祖の墓があり、自分が生をうけた懐かしい生まれ故郷にもどってくるものであり、たとえ出発点は違っていても、いつかはこのように再会して喜び合うものである」

「わたしが新しい思潮の真髄を早く悟れたのは、亡国の民族の子として生まれた悲しみと憤りのためであったといえよう。朝鮮民族に強いられたたえがたい不幸と苦痛は、わたしの精神的成長を促した。わたしは受難にあえぐ祖国と同胞の運命をわが運命としてうけとめた。それがわたしに、大きな民族的義務感をになわせたのである」

「単一民族国家であるわが国において、真正な民

族主義はとりもなおさず愛国主義であるというのは、動かしがたい一つの原理である。こうした原理からして、わたしはつねに愛国的な真の民族主義者との団結と協力を重視し、それを朝鮮革命の勝利の確固たる裏付けとみなした」

「革命家にとって監獄は一つの闘争舞台であるといえる。監獄をたんに幽閉場と考えるなら、受け身になってなにもできない。だが、監獄を世界の一部分と考えれば、その狭い空間でも革命に有益なことができるものである」

「民族の運命は、国を愛し民族を貴ぶすべての愛国勢力の団結と、民族あげての闘争によってのみ救うことができる」

「政治は器が大きくなければならず、政治家は度量が広くなければならない。政治の器が小さくては大衆をすべて包容することができず、政治家の度量が狭ければ、大衆はその政治家に顔を背けるであろう」

「他人の鋳型に無理にはめこんで革命の性格を規定しようとすれば教条主義に陥る。鋳型が優先するのでなく、具体的な現実が優先しなければならない。たとえ古典にはない定式化であり、他国にない規定であっても、それが自国の実情に合う科学的な規定であれば、共産主義者はためらわずにそれを選び取るべきである」

「われわれが零下40度を上下する満州の酷寒のなかで、15年ものあいだ、爪先まで武装した強敵と戦って勝つことができたのは、人民という強力な城塞があり、人民大衆という無限大の滄海があったからである」

「もともと革命というものは誰かに指示されてするものではなく、自分の信念と目的に従って自主的におこなうものである。この要求からして、われわれは革命の指導思想の創出も自分の力でおこない、わが党の起源となった『トゥ・ドゥ』も独自に組織した」

「人生を一つの道楽だと思えば、革命はやれずに

富を楽しむことにとどまり、道楽はできなくても人間らしく生きるべきだと思えば、資産家も革命運動に参加するのである」

「革命家の一生は大衆のなかに入ることからはじまり、革命の失敗は人民大衆の力を信じず、人民大衆のなかに入らないことからはじまるといえる」

「人民により幸せな生活と福利をもたらし、人民の支持声援のもとに開拓した革命を完成することが、彼らにたいする最大の報いであり、贈り物だと思う。人民にこうした報いをする前には、なんぴとも共産主義者としての義務を果たしたとはいえないであろう」

「わたしは彼らの話を聞いて、三つの点で深く考えさせられた。第一に、革命家が民心を把握するには、つねに大衆のなかに入らなければならないということ、第二に、武装闘争をはじめるにはなによりも大衆を政治的に覚醒させ、組織化する活動をいっそう積極的におし進めるべきである

ということ、第三に、いかなる闘争であれ、大衆がその意義を十分に理解し、進んでそれに取り組まないかぎり、成功はおぼつかないということだった」

「奪われた祖国を取りもどすために血を流し、命をかけて戦った人であってこそ、祖国がいかに貴く、祖国へ帰る道がいかに険しく試練にみちたものであるかを骨身にしみて感じるものである」

「もっともらしい革命的言辞とはねあがったスローガンの裏で、極左はつねに大衆を愚弄し、抑圧し欺き、功名と栄達を夢見るものである。その功名と栄達のために、自分を最前線で突進する戦車や装甲車でもあるかのように描写するのが極左なのだ。変装した反革命が極左に早変わりするのはそのためである。それゆえ共産主義者はつねに警戒心を高め、自己の陣地に極左の足がかりとなるようなすきを与えてはならないのである」

「右翼が公然たる反革命であるなら、『左』翼は

隠蔽された反革命であり、右翼がガンであるなら、『左』翼もそれに劣らぬ毒キノコである。右翼と『左』翼は革命という一つの巨木に寄生しながらも、互いに背を向け合って同床異夢をしているかのようにみえるが、実際には一つの脈絡に深くつながっているのである。個人が極左に走れば集団を害し、政権党が極左に走れば人民を失い、革命を敗北させかねないという真理を銘記しなければ、社会主義を守ることもできない」

「革命は自分が立てた戦略的目標を達成するために、新しい環境と条件に即応して戦術を不断に更新しなければならない。こういう更新なしには革命は沈滞をまぬがれなくなる。」

「愛に国境がなく、科学に国境がないように、革命にも国境はない」

「真の共産主義者も真の愛国者であり、また真の民族主義者も真の愛国者であるとみなすのは、わたしの変わらぬ信条である」

「全民族の団結した力によってのみ祖国の運命を救うことができるというのが、苦難にみちた抗日革命闘争の歴史的教訓である」

「われわれは人を殺すためにではなく、生きんがために銃をとったのである。祖国を救い同胞を救うのがまさにわれわれの闘争目的であり使命であった。われわれの銃剣はもっぱら祖国を占領し、わが民族を圧殺し、朝鮮人民の生命と財産を侵害する敵の懲罰にのみ向けられた」

「抗日闘士たちは歴史に名を残すためではなく、歴史を創造するためにたたかった人たちである。われわれは山中でたたかうとき、次の世代がわれわれを記憶しても、しなくてもかまわないという立場で万難を克服した。もしわれわれが歴史に名を残すために銃を手にとった人間であったなら、今日、新しい世代が抗日革命史と称している偉大な歴史を創造することはできなかったであろう」

「白頭（ペクトゥ）山はわが国の祖宗の山で朝鮮の象徴であり、

5000年の悠久の歴史を誇る民族史の発祥地である」

「創建されて間もないわが共和国が地球上の『最強国』を相手にして戦い、打ち負かすことができたのは、敵側がほとんど軍事力のみを動員したのに反し、わが方は全人民が立ち上がり、軍民が団結して戦ったからである」

「生まれながらの革命家というものはありえず、人間は生活と闘争の過程で闘士に、革命家に成長するのである。人間が革命家に成長する過程は各人各様であるが、思想が堅実で愛国愛族の一念に燃える人が、正しい指導を受ければ革命家になれるというのは革命の真理であり、歴史の教訓である」

「民族の命運が生死の岐路にあった暗澹たる時期に、抗日の勇士たちが祖国の地にとどろかせた銃声は、うちひしがれていた同胞の魂をよみがえらせ、抗日革命の前途に勝利の曙光を輝かせた」

「祖国の統一はわたしの生涯を貫く不変の意志

であり信念である。5000年の歴史を誇る朝鮮民族は、当然、一つの統一国家で暮らすべきであり、またそうできるというのが民族統一についてのわれわれの立場であり、観点である」

「われわれは北と南、海外のいずこにいようと、必ず統一戦線を形成すべきである。統一戦線のみが、弱肉強食の法則が支配するこの世界で、朝鮮民族が生存できる唯一の道である。統一戦線は民族が民族として生き残るのに必要な永久的な生存方式である。民族の活路も統一戦線にあり、民族隆盛の道も統一戦線にある。これが国内外の朝鮮同胞に述べたいわたしの所信である」

「わたしは革命の道に踏み出した当初から、つねに思考の出発点を朝鮮革命においた。たとえわが身は異国にあっても、心はいつも祖国と同胞のもとにはせていた」

「人間が言葉まで奪われてしまえば、人間としては知能を失った痴呆となり、民族が言葉を

奪われれば、その民族であることを放棄するのと同じである。民族の表徴のうちで、血筋の共通性とともに言語の共通性がもっとも重要な要素となるのは世界公認のことである。民族語は民族の精神ともいえる。したがって言葉を奪い抹殺するのは、民族の全構成員から舌を切り取り、魂を奪うにひとしい残虐無道な所業である。領土と国権を失った民族にとって、残るものは言葉と精神しかない」

「戦争や戦闘の位置づけは軍事的意義のみではなく、その政治的意義によっても決まるものである。戦争が他の手段による政治の延長であることを知る人であれば、これは誰にでも難なく理解できることだと思う」

「普天堡戦闘のもっとも重要な意義は、朝鮮は滅びたと思っていた朝鮮人民に、朝鮮は死なずに生きているということを示しただけでなく、たたかえば必ず民族の独立と解放をなしとげることができるという確信を与えたところにある」

「革命は国際的性格をおびる前に、まず民族的性格をおびるものである。革命は民族国家別に進められるのであるから、個々の国の共産主義者が自力で革命を遂行しようという確固たる決心と信念をもち、自国人民の力に依拠して頑強にたたかっていけば、いかに険しい高地でも十分に占領できるというのが、わたしの終始一貫した主張であり持論でもある」

「共産主義者ではないとしても、ともに統一祖国を建設していける共通分母を見出さなければなりません。わたしは、その共通分母は愛国、愛族、愛民だと考えます。愛国、愛族、愛民の思想をもつ人たちとは、同じ空気を吸って生きていくことができるのです」

「わたしの体験によれば、革命に参加するのは夢が多く理想の高い人です。夢が多く理想が高くてこそ、偉大な発明もします」

「女性が革命の片方の車輪を受け持っていると

いうわたしの主張は、抽象的な概念ではありません。それは血に彩られた抗日革命史と、わが国の女性解放運動の参加者、実見者としての生きた体験にもとづいているのです」

「われわれが進める革命は人間を葬るためのものではなく、人間を愛し、保護し、人間性を固守し、それを最大限に発揚させるための革命です。人間を葬るのは容易なことですが、救うのは非常にむずかしいことです。しかし、われわれはいくら骨がおれても、過ちを犯した人に再生の道を開き、人間として真の生活が営めるよう信頼し助力すべきです。人間を人間らしく処遇し、復活させるのがもっとも誉れ高く偉大な革命です」

「理念の違いや財産の有無は、人間を評価する絶対的な基準にはなりえません。もっとも普遍的な人間評価の基準があるとすれば、それは祖国愛と民族愛、人民愛、人間愛でしょう。人間を貴ぶ人が民族を愛し、民族愛の強い人が祖国を愛するというのは一つの法則であり、誰も否定できない真理です」

「勝利した革命を支持、擁護し、その革命の獲得物の保持、強化のために最善をつくすのは、共産主義者の国際主義的任務であると同時に、信義であり道徳でもあります。先んじた革命を積極的に援助してこそ、遅れをとった革命もその連関のなかで成功裏に躍進することができるのです」

「革命は、思想・意志や規律だけでできるものではありません。思想・意志、道徳・信義とともに、ロマンを宿した情操をもってするのが革命なのです」

「革命家に試練はつねに宿命的についてまわるものといえます。古いものを変革し、新しいものを創造する革命家の日常生活は、つねに試練と難関をともなうものであるからです。試練を恐れたり、それを避けて歩く者は革命家とはいえません」

「革命は銃をもって進めるべきであり、民族の独立や社会的解放をめざすすべての闘争の結末は、おおよそ武装闘争によって決まります。われわれが抗日革命で勝利することができた基本的要因も、独自

の革命武力をもっていたことにあります」

「国力も銃から生まれ、民族的自負も銃から生まれます。軍隊が強ければこそ民族が興隆し、国も繁栄するのです。銃を抜きにした自主性はありえません。銃が錆つけば人民が奴隷になります」

「革命家の価値は革命にたいする自主的立場の強さに正比例するというのがわたしの主張です。自主的立場が確固としたものであればあるほど革命家の権威は高まり、自主性が透徹したものであればあるほど革命は百戦百勝するものです」

「郷土愛に燃える人は祖国愛も強く、祖国愛の強い人は革命にたいする熱意も高いものです」

「革命とは闘争のみを意味するものではありません。革命には闘争もあり、生活もあります。闘争と生活を融合させ、闘争のなかで美しい生活を創造し、社会の進歩と繁栄をとげていくのが、まさに共産主義者の志向する革命なのです」

「亡国によって深手を負った朝鮮人民の民族的自尊心は、われわれが白頭山で武装闘争をくりひろげるようになってから、百倍、千倍に高まりました。それは、以前の民族的自尊心とは比較にならない高い形態の革命的自負です。こうしてみると、朝鮮人民の真の民族的自負と祖国愛は、白頭山にその始原があると言ってよいでしょう」

「朝鮮の解放は20年の歳月にわたった抗日革命闘争の総括であると同時に、内外の広範な反日愛国勢力が数十年間、血と汗を惜しみなくささげ、犠牲をいとわず民族をあげてくりひろげた英雄的抗戦の結実であるともいえます」

「党争がはびこり、党派と外部勢力が結託すれば、行きつくところは亡国しかありません」

「亡国は一瞬であり、復国は千年だというのが、抗日革命20年の行程を歩みながら、わたしが得た一つの重要な教訓でした。失うのはたやすいが、取りもどすのは難しいのがすなわち祖国だという意味

です。一瞬にして失った祖国を取りもどすために数十年、数百年の苦労を強いられるというのが、現世のきびしい掟なのです」

「だからこそ、わたしはいまも折に触れ若い人たちに、祖国を失えば生きていても屍（しかばね）に等しい、亡国の民になりたくなかったら国をしっかり守れ、亡国の悲しみに痛哭する前に、祖国をいっそう富強にし、石くれ一つでももっと拾って城塞を高く築け、と言い聞かせているのです」

２．党と大衆

「わたしは人民のなかに入ることで革命活動をはじめ、今日も人民のなかに入ることで革命をつづけている。そして、人民のなかに入ることで人生の総括をしているのである。一度でも人民との交わりを怠り、一度でも人民の存在を忘却する瞬間があったとしたら、わたしはすでに１０代のころに形成された人民にたいする純潔で真実の愛を今日まで守りとおすことができず、人民にたいする真の奉仕者

になることができなかったであろう」

「それでわたしは幹部たちに、人民のなかに入れと口ぐせのようにいっている。人民のなかに入るのは強壮剤を服用するのと同じであり、入らないのは毒薬を飲むにひとしい、とわたしは日ごろから強調している」

「人民的品格と人民の利益に合致する人民的思考方式は、決して机の前に座っていておのずとそなわるものでなく、まして空論によって身につくものではない。それは人びとの肉声はもとより、息づかい、目の色、表情、言葉づかい、手ぶり、動作まで自分の目と耳でじかに確かめる、人民との血の通った接触を通じてのみ身につくものである」

「革命家の生命は大衆のなかに入るときにはじまり、大衆から離脱するときに終焉を告げるといえる」

「党が革命において参謀部の役割を果たし、党の役割によって革命の成否が左右されるということ

は周知の事実である。革命が歴史の機関車だとすれば、党は革命の機関車だといえる。そのため革命家は党を重視し、党の建設に心血を傾けるのである」

「指導思想、指導中核、大衆的基盤――これは党組織結成の必須の要素である」

「最初の党組織――建設同志社はわが党の胎児であり種子であり、党の基礎組織を結成し、拡大するうえで母体としての意義をもつ組織であった」

「人民のためにこうむる国家の『損失』は損失とはいえない。人民の福祉のためにより多くの資金が支出されるほど、わが党はより大きな喜びを感じ、次の世代のためにより大きな『損失』をこうむるほど、国家はより大きな満足を覚えるのである」

「わたしは一心団結、軍民一致を朝鮮革命におけるもっともりっぱな成果の一つと考えている」

「人びとの政治的生命を扱う幹部は、大衆と呼吸

をともにすることを片時も忘れてはなりません。大衆と呼吸をともにするというのは、人民がシャベルを手にするときは自分もシャベルを手にし、人民が粟飯を食べるときは自分も粟飯を食べ、人民とすべてを分かちあうということです。大衆と呼吸をともにしない人は、人民の感情や心理がよくわからず、彼らの要求と志向がどんなものであるかもわかりません」

「わが党は仁徳政治をおこなう党であり、わが国は仁徳政治の恩恵のもとに万人が一つの大家庭のなかでむつまじく暮らす国です。われわれの仁徳政治は、人びとの肉体的生命のみでなく政治的生命をも保護し、見守るべき使命をになっています。わが党がもっとも重んじるのは人びとの政治的生命です。思想と理念を同じくする人びとがひとところに集まって成るのがすなわち組織であり党であり、各人はその集団のなかで政治的生命を授かるようになります。数百万の大衆が持している政治的生命がそのまま組織の生命となり、党の生命となる理由がまさにここにあるのです」

「常時、外部勢力の威嚇を受けている朝鮮民族の座右の銘は、何よりも民族大団結であるべきです。民族の栄枯盛衰は、ひとえに民族の全構成員がこの座右の銘にどれほど忠実であるかにかかっていると思います」

３．思想と理論

「革命的世界観は、人びとが自己の階級的立場と利害関係を認識することからはじまって、搾取階級を憎み、自己の階級の利益を守ろうとする思想をもち、ひいては新しい社会を築こうという覚悟をもって革命の道に臨むときに確立されるといえよう」

「学習は、革命家の自己修養にとって欠かせない基礎工程であり、社会の進歩と変革の元手として一日の中断をも許さない必須の精神労働である。吉林時代の先進思想の探求過程を通して得た教訓から、わたしはいまでも、革命家にとって学習は第一の任務であると強調している」

「こうしてわたしは、自国の革命は自らが責任をもち、自国人民の力に依拠して遂行してこそ勝利するのであり、革命で提起されるすべての問題を自主的に、創造的に解決していかなければならないという信念をいだくようになった。これがいまいっているチュチェ思想の出発点となったのである」

「その時わたしは、わが国の具体的現実と社会的・階級的諸関係からして、朝鮮革命の性格を反帝反封建民主主義革命と規定し、武装した日帝を打倒して祖国を解放するためには武器をとって戦うべきであり、労働者、農民、民族資本家、宗教者をはじめすべての愛国勢力を反日の旗のもとに結集してたたかいに決起させ、派閥争いのない新しい革命的党を創建すべきだという闘争方針を確定した」

「『以民為天』——人民を天のごとくみなす、というのがわたしの持論であり、座右の銘でもあった。人民大衆を革命と建設の主人として信頼し、その力に依拠するというチュチェの原理こそ、わたしがも

っとも崇敬する政治的信仰であり、まさにそれがわたしをして、一生を人民のためにつくさせた生活の本質であった」

「学習もせず組織生活もしなくては、革命運動に長年たずさわった闘士であっても、時代に立ち後れてしまう」

「遊撃戦は、自己の戦力を保存しながらも敵に大きな政治的・軍事的打撃を加えることができ、小兵力で量的にも技術的にも優勢な敵を掃滅しうる武装闘争方法である」

「つねに人民を信じ、いかなる状況にあっても革命的信念を棄てず、終始一貫自主路線を堅持して広範な反日勢力を一つに結束したことが、抗日革命の勝利の主なる要因であった」

「人間の第一の属性が自主性であるように、民族の生存を保障する第一の源も自主性にある。個々の人間の生活においても、民族をなす大集団の生活に

おいても、その運命を左右する基本的な生存条件は自主性であるといえる」

「自主性というのは、誰かがつくりだして贈ってくれるものでもなく、時間の累積とともにおのずから実現するものでもない。それは闘争によって自らがかちとらなければならない。自らをかえりみない不屈の犠牲的な闘争精神を発揮する人であってこそ、自主性を獲得して、その永遠なる主人となることができるのである」

「わたしは一生、民族の尊厳のためにたたかってきた。わたしの一生は民族の尊厳と自主性を守る闘争の歴史であったといえる。わが民族を害したり、わが国の自主権を侵す者をわたしは一度も許さなかった。朝鮮人民を見下し愚弄する輩とも妥協しなかった。われわれに友好的な人たちとは善隣関係を結んで友好的に交わり、非友好的であったり差別する人たちとは関係を断って生きてきた。相手がわれわれを討てばわれわれも相手を討ち、相手がわれわれに微笑を投げればわれわれも相手に微笑を投げた。餅には餅で報い、石

には石で報いるというのが、生涯を通じてわたしが固守してきた相互主義の原則である」

「真実を反映してこそ、文学は読者大衆を美しく崇高な世界へ導くことができるのである。真実を反映することによって人民大衆を美しく崇高な世界へ導くのが、ほかならぬ文学・芸術の真の使命である」

「人間が人間らしく自主的に生きていくのに必要な真の思想と真の道徳、真の文化をもたらすのがほかならぬ現代芸術の基本的使命である」

「自主化を志向する各国の革命家と人民にとって、組織のもつ意義は永久不変だといえる。時代が変わったからと組織の役割が薄れるものではなく、革命が生々発展するからと人民大衆の組織化を弱めてもかまわないというものではない。大衆の組織化は権力をかちとる闘争のためにも必要だが、権力をかちとったあとの国家建設のためにも必要であり、共産主義社会を建設したあと、その成果をふまえて革命をつづけるためにも必要なのである。革命

に限りがないように、大衆を組織化する活動にも終点というものはありえない。まさにこれが社会発展の原理であり、発達した社会の建設をめざしてたたかうすべての人が重視しなければならない法則なのである」

「出版物は革命闘争の有力な武器の一つである。この武器の射程距離は無限である」

「人間がすべてを決定するというのは結局、人間の思想・意識と知的能力がすべてを決定するということです。人間の思想・意識と知的能力は学習を通じてたえず高めなければなりません」

「わたしは、学習に励まずとも信念が強いという人を見たことがなく、信念が強くなくても革命的信義に忠実だという人を見たことがありません。学習に励む人であってこそ信念も強く、革命に投じようという情熱にも燃えるものです。人はその知識に応じて見、聞き、感じ、受けとめるという金正日(キムジョンイル)同志の言葉はきわめて意味深長な名言です」

「人間愛と人民愛、祖国愛は天から降ってくるのではありません。それは健全な思想と信念によって培われるのです。わたしは、道徳品性の低劣な者が、人間を愛し、人民を愛し、祖国を愛するのを見たためしがありません。

わが国の社会主義が他の国の社会主義と峻別される点は、党と国家が物質本位の経済建設にのみ力をそそぐのではなく、人間本位の思想教育を優先させ、技術的、実務的にのみではなく、精神的、道徳的にもりっぱな資質をそなえた真の人間を育てあげるところにあります。われわれは物質第一主義者ではなく、人間第一主義者であるがゆえに、わが国にすぐれた人材が増えることを最高の富とみるのです」

「事大主義というのはなにも特別なものではありません。力が弱いとき他国に頼ろうとしたり、他国にすがって活路を開こうとすれば、おのずと事大主義が生まれるものです。事大主義という病気は、天性のものでもなければ天から降ってくるものでもありません。自分の力を信じなかったり、過小評価するようになれば、いかに愛国心の強い人でも事

大主義者になってしまうものです」

「この世のものはすべて改造できるというのがわたしの主張です。自然改造、社会改造、人間改造のうちでもっともむずかしいのが人間改造です。けれども、労すればすべて改造できるのが人間なのです。人間はその本性からすれば、美しいものと気高いもの、正義なるものを志向します。したがって、思想教育を正しくすれば誰でも改造することができます。人間改造というのは本質において思想改造です」

「進歩的な思想というのはほかならぬ、人間愛、人民愛、民族愛、祖国愛です。人間の良心も結局はこういう愛によって表現されるのです」

「主観のとりこになる人は明き盲になってしまいます。いま一部の人は、自説に固執して下部の人の意見をないがしろにしていますが、それは大きな誤りです。諸葛亮も名だたる天才ではありましたが、人民大衆はそれよりもっと知恵深く賢明です。路線や方略は、万人にその正当性が認められてはじめて

効を奏するものです。大衆の支持しない路線や方略は無用の長物です。大衆は正当かつ正確で透明な路線のためにのみ奮い立つものです」

「革命の前に障壁が立ちふさがり、複雑な情勢がかもしだされるときであるほど、主体的立場をいっそう堅持し自主的に活動するのは、われわれの一貫した原則です。コミンテルンとの関係でもそうでしたが、周辺の大国との関係でも、われわれはつねに自主性と国際主義を正しく結合してきました」

「歴史は、革命の原理を無視して主観主義に偏する人にはりっぱな結実を与えはしないものです」

「革命の主体性とはなんでしょうか。独自の判断と決心によって、自国の特性と実情に即して革命を自主的に進めていくということです」

「人間がもっている思想的な未熟さは学習と革命の実践を通じて克服され、またその過程を通じて思想的に鍛えられ円熟していくものです」

「思想活動は仕事がむずかしく情勢がきびしいときであるほど、いっそう積極的におこなわなければなりません。わたしは思想論を主張します。わたしは思想至上主義者であり、思想をいかなる財宝よりも大切にする人間です」

「学習も戦闘だという言葉は、われわれが実際の生活のなかで見いだした真理です。革命家は生の最後の瞬間まで学習を中断してはなりません。学習をしないと思想に錆がつき、先を見通すことができません」

「今日の難関を笑って乗り越え、明日の祖国のために昼夜を分かたず働く人たち、思索と探究を重ねながら次代の未来を設計していく人たちだけが、真の共産主義者、熱烈な革命家になれるのです」

４．人民と忠僕

「朝鮮民族ほど情にほだされてよく笑い、よく泣く民族がまたとあろうか。それで先人も、鬼神は経文に弱く人間は人情に弱いといったのである。

客を歓待するのは朝鮮人の美徳である。客を断らずに泊めるのが祖先伝来の朝鮮人民の風俗であり人情である」

「人民は自分を同情し理解する人には進んで心の扉を開くものである。そして熱く彼らを包容するのである。しかし、自分を生み育てた土壌が人民であることを忘却した恩を知らない者、人民には自分に仕える義務があり、自分には奉仕を受ける権利があると思う高慢な者、人民をぞんざいに扱ってもよいと思いあがっている官僚層、人民をいつでも乳の搾れる乳牛のように思いこんでいる搾取者、人民を愛するといいながらも人民が苦痛をなめているときはそしらぬ顔をするくわせ者や偽善者、やくざ者、ペテン師にはかたくなに心の扉を閉ざすのである」

「わたしは生涯たびたび生命の恩人に出合っているが、偶然はつねにわたしに味方しているのである。人民のために生涯をささげる人には、偶然も善意をほどこすのであろう」

「人民の愛情につつまれて生きる人間は幸せであり、そうでない人間は不幸である。これはわたしが一生もちつづけている幸福観である。いまでもわたしは、人民から愛されることに最大の生きがいと幸せを感じている。人生第一の冥利はここにあるのではなかろうか。この冥利を知る人だけが人民の真の息子になり、忠僕になれるのである」

「人民はわれわれの力であり、知恵であり、生命であることを銘記すべきである。それゆえ人民を信じ、人民に学び、人民に依拠し、人民を動かして戦わなければならない。人民の助けを受けたければ人民から愛されなければならず、人民から愛されたければ先に人民を愛さなければならない」

「人民に支持されない軍隊は決して強い軍隊になれず、戦いで勝者になりえない。これは抗日革命闘争の全期間、わたしが骨身にしみて体験した真理である。わたしは抗日武装闘争の日々、『魚が水を離れては生きていけないように、遊撃隊は人民を離れては生きていけない』と一貫して主張してきた。

それを一言に圧縮した標語が『擁軍愛民』である。『擁軍愛民』とは、人民は軍隊を擁護し、軍隊は人民を愛護するという意味である」

　「人民を心から愛し敬い、人民の利益と生命、財産を心から守る軍隊であってこそ、人民から惜しみなく支持され声援される」

　「わたしも生涯を通して切実に体験したことだが、人民のなかへ入っていこうとすれば、まず自分を人民の子であり、忠僕であり、友であると思い、また彼らを自分の父母や兄弟、教師と思わなければならない。自分が人民の教師であり、人民に君臨する官僚、人民を治める指導者であると思い込む人間は、人民のなかへ入りその信頼を受けることができない。人民はそのような人たちには心の扉を開こうとしないのである」

　「自分が人民に君臨する特殊な存在と思いあがるようになれば、結局、大衆に見放される哀れな存在になるほかない。水に浮いた油のように人びとのなかにと

けこめず、上っ面をなでまわすだけでは大衆の好感を得られず、彼らを獲得することもできないのである」

「人民の愛、人民の支持——わたしはいままでこれを革命家の存在価値と幸福をはかる絶対的な基準としてきました。人民の愛と支持を抜きにして革命家に何が残るでしょうか。残るものは何もありません。

ブルジョア政治家は金で人民を引きつけますが、われわれは血と汗によって人民の信頼を得ました。わたしは人民が示した信頼に感激し、それをわたしが享受しうる一世一代の幸福と受けとめました」

５．人間と生活

「世の中で母の愛情ほどあたたかく、真実で、変わりのない愛情はないであろう。叱っても鞭で打っても痛くないのが母の愛情であり、子どものためなら空の星でもとろうとするのが母の愛情である。それは代価を求めない」

「『志遠』の思想、三つの覚悟、同志獲得の思想、２挺の拳銃――これが父から譲りうけた遺産の全部であった。それらはきびしい困難と犠牲を前提にして残された遺産であった」

「終生回顧しうる師がある人は、たしかに幸せな人である」

「革命にたずさわるからということで家庭を忘れるのは容易なことでないし、実際にはありえないことである。革命も人間のためのものである以上、革命家がどうして家庭を無視し、父母や妻子の運命から顔をそむけることができようか。われわれはつねに、家庭の幸福と国の運命を同一線上においてとらえてきた。国が逆境に陥れば家庭も平穏でありえず、家庭に影がさせば同時に国の表情も暗くなるというのが、わたしの持論であった」

「父はわたしに、代をついでたたかっても必ず国の独立をなしとげなければならない、という不屈の革命精神を植えつけてくれた師であったが、

母は、いったん革命を志した人間は情におぼれたり脇見をすることなく、最後まで目的ひとすじに突き進まなければならないという理を教えてくれたありがたい先生であった」

「友情の深さを決めるのは時間でもなく弁舌でもない。長い交わりだからといって友情が深まるものではなく、短い交わりだからといって友情が薄いというわけでもない。要は人間とその運命にたいし、民族とその運命にたいし、いかなる立場と態度をとるかということである。こうした立場と態度の共通点と相違点は、友情を倍増させることもできるし、破綻させることもできる。人間愛、人民愛、祖国愛、これは友情を確かめる試金石である」

「わたしはもともと、生活を悲観的に見る人間より、楽天的な人間を好んだ。われわれが山で、草の根を噛みながら苦しい武装闘争をしていたころは、一人の楽天家が数十門の大砲に匹敵する力を人びとに湧き立たせたものである」

「財産が多くても人徳がなければ世間から遠ざけられる。粗末な家に住んでも人徳が高ければ、大勢の友人を持ち、人びとに尊敬される道徳的な富者になれる」

「真の人情は広壮な屋敷ではなく、庶民の住む粗末な家にあった」

「もし誰かに、生活でいちばんうれしく幸せだと感じるのはどんなときかと聞かれたら、わたしはこう答えるであろう。『わたしの生活で喜びと幸福はごく普通なこととなっている。それは、わたしがこの世でもっとも美しく理想的な生活が創造されている国で、政治的にもっとも自主的で、思想的にもっとも進歩的で、文化的、道徳的にもっとも開けた純真無垢な人民とともに、楽天的な生涯を送っているからだ。わたしの生活は毎日毎時、喜びと幸福にみちている。とくにうれしく幸せなときがあるとすれば、それは人民とともにいるときであり、その人民の中から全国のモデルになるりっぱな人間を見出し、彼らと時局を論じ、生活を論じ、未来を論じ

るときである。それに、われわれが国のつぼみと呼んでいる子どもたちと一緒にいるときである』これは、わたしの一生を貫いている幸福観だといえる」

「人間の住む所に生活があるのは当然であり、生活のある所には芸術があって然るべきである。芸術のない世界がどうして人間の世界といえ、芸術のない生活がどうして人間の生活といえようか。それゆえ、わたしは人びとにいつも文学・芸術を愛せよと話し、また全国の大衆に文学と芸術を享受し、創造できる人間になれと説いているのである」

「魅力というのは決して複雑、絢爛、多弁、仰々しさなどにあるのではないと思う。もっとも単純で平凡、素朴、率直なところにこそ、人間の魅力の核心があるのである」

「白頭の密林と満州の広野で抗日闘士たちを一つの大家庭に結びつけたのもやはり情誼であり、愛であった。人間の住むところに情誼がなく愛がなければ、山河も光を失うものである」

「わたしの人生体験によれば、歌は革命的楽観主義のシンボルであり、革命勝利のシンボルです。わたしがよく言うことですが、人間生活には詩もあり、踊りもあり、歌もあるべきです。人間生活に詩もなく踊りもなく、歌もないとすれば、生きる楽しみがどこにあるのでしょうか」

「わたしは楽観主義を主張し、楽天的な人間を愛します。天が崩れ落ちても脱け出る穴はあるというのは、わたしが重んじている座右の銘の一つです。わたしが辛酸をなめつくしながらも、いかなる動揺や偏向もなしに、つつがなく革命と建設を指導してくることができたのは、この楽観主義のおかげです」

「人間はよいことをすればよい友に巡り合い、よい友とは別れても再び会えるものです」

「『三益友』とは、交わって得になる三種類の友人という意味です。すなわち、正直な人、信頼できる人、見聞の広い人が『三益友』で、そういう人と

は付き合ってもよいということです。『三損友』とは、交わって損をする三種類の友人という意味です。すなわち、偏見の強い人、優しくても気骨のない人、口達者で中身のない人とは付き合うべきでないということです」

「『善い行いをすれば良い友を得る』というのは当を得た格言です。良い友人を得るためには、善いことをたくさんしなければなりません。国と集団、同志と隣人のために善いことをしない人には、良い友人ができません」

「わたしは個人利己主義に反対するだけでなく、民族利己主義にも反対します。自分だけよい暮らしをしようとするのが人間らしい生き方といえるでしょうか。人間が味わう楽しみのうち、他人を助けることより大きな楽しみはないと思います」

「人間の生理的年齢が生活をいかに楽天的に営むかによって左右されるように、一国の革命の成否や生命力は革命的楽天主義によって左右されると

いうのがわたしの見解です。人間は楽天的に生きてこそ、一日を生きても生きがいを感じることができるものです。意気消沈し憂うつに生活する軍隊は団結もできず、勇敢に戦うこともできません」

「革命的楽天主義は自然に生まれるのではありません。たえまない教育、不断の思想鍛練によってのみ養われるのが革命的楽天主義なのです」

「人生の第一歩を祖国と人民のために、人類のために踏み出した人は、人生の終末も祖国と人民のために、人類のために結ばなければなりません。それでこそ、その一生が人びとの記憶に永久に残る高潔で美しいものとなるのです」

６．軍事と指揮官

「戦いは日常生活の延長であり総括ともいえる。軍人の戦闘成果は、戦場ではなく、平時の生活ですでに決まるといっても過言ではない。戦いはその日常生活の反映であり、端的な表現にすぎないのである」

「戦争は力の対決にとどまらず、道徳と倫理の対決でもある。戦争過程で道徳の影響力を無視するか、道徳そのものを無用の装いとみなすなら、そのような軍隊は一つの巨大なごみの山のようなものである」

「指揮官はつねに能動的に指揮し、複雑、困難な状況を前にして動揺したりためらうべきでなく、決断力をもって行動しなければならない。しかし、部隊の指揮にあたって主観や独断に走ってはならない。指揮官は上級の命令実行と戦闘の指揮において大衆の力と知恵に依拠すべきである。指揮官は命令一つで部隊を指揮するのではなく、なによりも政治的働きかけによって、隊員の自覚的熱意を呼び起こさなければならない」

「わが国は世界に堂々と誇れる強力な武器を持っている。それはほかならぬ軍民一致、将兵一致である。このような強力な武器はいかなる軍事科学や技術によってもつくりだせない。ただ真の愛情によってのみつくりだせるのである」

「戦いはつまるところ、知恵と知恵の対決であると同時に、信念と信念の対決、意志と意志の対決、勇気と勇気の対決でもある」

「指揮官の肝がすわっていれば兵士たちも肝がすわり、指揮官が確固たる信念をもっていれば兵士たちの信念と意志もゆるがないものです。兵士たちの楽天性が指揮官の信念によって左右されるように、人民大衆の楽天主義は指導者の信念と胆力によって決まります。困難なときに大衆がまず指揮メンバーの顔色を見るのはそのためです」

「戦闘の過程で思わぬ状況が生じ障害が立ちふさがるほど、指揮官は鉄の意志と胆力をもち、冷徹な思考力を働かして新たな状況に対処し、臨機応変の方法で沈着に逆境を克服していかなければならない。国益を擁護するための対敵闘争にせよ、自然や社会を改造するための闘争にせよ、こうした要求が提起されるのは不可避であると思う。状況の変化に巧みに対処し、必要なときに必要な決心を迅速に下す能力は、すべての指揮官がそなえるべき重要な資質である」

７．信念と信義

「思想や信念が変われば、義理や人情も同時に変わるものである。それまで刎頸の交わりを結んだ者のあいだにひびが生じ、不和になるのも、ある一方の思想が変わるからである。永遠に変わらないと誓った友情や同志的連係も、ある一方が思想的に変質すればひびが入るものである。思想を守らなくては義理や友誼も守れないというのが、その後の長期にわたる革命闘争のなかで得た一つの教訓であった」

「革命家がためらいなく生命をも託せる清く堅実な道義は、やはり勤労人民のなかにあった。それで、わたしはつねづね戦友たちに、革命運動で困難にぶつかれば人民を訪ねるようにといった。ひもじくても、喉が乾いても、悲しいことがあっても人民を訪ねるようにといった」

「革命家の前途に困難がないとすれば、それはもはや革命とはいえないであろう。革命家は苦しいと

きほど不屈の意志をもち、確信にみちて困難をのりこえていかなければならないのである」

「鋼鉄も酸化すれば変化をきたすものである。まして、人間は鋼鉄でもなく、弱くて変わりやすい存在なのである。だが、人間は鋼鉄よりはるかに強いともいえる。なぜなら、鋼鉄は自分の力で酸化過程を防げないが、人間は自分の思想に起こる変化を自ら統制し調整する能力をもっているからだ」

「人間を万物の霊長というのは、人間が自分自身を調整できる特有の能力をもっているからであり、革命家を偉大だというのも、彼らが無から有をつくりだし、逆境を順境に変えることのできる剛毅かつ創造的で犠牲的な人間であるからである」

「テロはテロによって滅び、極左は極左の審判台でついえ去るものであり、信念と気骨のない二股膏薬の人間の運命は自滅のほかにない。これが数十年にわたる動乱の時代に生きてきたわたしのいま一つの人生体験だといえよう」

「金品に目がくらむと、党と領袖、祖国と人民も眼中になく、あまつさえ父母や妻子もかえりみない唾棄すべき人間になってしまう――これが80風霜の人生を総括しながら、わたしが次の世代に言っておきたいことである」

「人間の道義は封建的な道徳でいう君臣や親子のあいだにのみ存在するものではなく、友人や同志のあいだにも存在するものである。『友の道理は信にあり』というのは、こういう理を説く成句であろう。それで昔の聖賢たちは、徳と道義にもとづく徳治主義を宣揚して『仁者に敵なし』と言った。徳があれば人を得、人があれば土地を得、土地があれば財を得、財があれば用をなす、と教えているのである。『徳人地財用』の5字に含蓄されている昔の東方哲学のこの事理はじつに奥深い妙味をもっており、現代の生活においても参考とすべき価値は大であると思う」

「生きている人は逝った人を忘れてはならない。生きている人が故人を忘れないでいてこそ、その友

情は強固で真実で、永遠なものになりうる。生きている人が故人を忘れるならば、その瞬間から友情は消滅をまぬがれない。故人をつねづね追憶し、彼らの業績を広く紹介し、その子孫を見守り、彼らの遺志を守ることが、先代と先達、先に逝った革命同志にたいする生きている人の道義だと思う。このような道義なくしては、歴史と伝統の真の継承はありえない」

「底抜けに良心的な人こそ底抜けに率直なものである。率直さは白雪のように汚れない良心の反射であり、隠しきれない良心の光といえる」

「上司の顔色をうかがって、白を黒、黒を白と言い、時勢に応じてこうも言ったりああも言ったりして、上部におもねるのは忠臣ではなく奸臣である。奸臣の舌先に真実は宿りえない」

「抗日革命時代の信義のなかできわだった地位を占めるのは、指導者と大衆との信義である。われわれは、朝鮮革命における統一団結の中心が形成さ

れてから今日にいたるまで、終始一貫、指導者と大衆とのつながりを強めることに格別の関心を払い、指導者と大衆の渾然一体と道徳的・信義的結合に最善の努力を傾けた」

「指導者は大衆に奉仕し、大衆は指導者に忠誠をつくすのが、ほかならぬ指導者と大衆のあいだに通うわれわれ流の共産主義的信義である」

「抗日革命闘士は指導者への信義を守るうえでのみでなく、革命同志への信義を守るうえでも最高の境地を開いた。愛には愛をもってこたえ、信頼には信頼をもってこたえ、恩恵には恩恵をもって報いるのが抗日遊撃隊員の信義であった」

「わたしの生涯を通じての志向は、防御ではなく攻撃だったといえる。わたしは革命に身を投じたその日から今日にいたるまで、敢然として立ち向かう攻撃戦術をもって人生を生きぬいてきた。前進途上に難関が立ちはだかるたびに、わたしはその前でためらったり動揺したりしなかったし、迂回したり避

けたりすることもなかった。困難なときほど信念を失わず、不退転の意志とねばり強い努力によってそれをのりきってきた」

「革命は信念があっておこなうものであり、その信念は政治的理念への信頼である前に、自国人民にたいする信頼と誇りなのである。自民族、自国人民への信頼と誇りがなければ、愛国心など生まれるはずがないのである」

「信念と意志は革命家がそなえるべき基礎的資質である。この資質をそなえていない人は革命家とはいえない。真の人間の表徴を論ずるとき、われわれは当然ながら、その人間がどんな思想と信念をどう身につけているかを重視する。なぜなら、思想と信念の強い人間であるほど生きる目標が明確で、その目標を達成するため誠実に努力するからである」

「信念と意志は不変のものではない。環境と条件によっていっそう強くもなれば弱くもなり、変質をきたすこともあるのが信念と意志である。革命家の

信念と意志に変質が生じれば、その革命ははかり知れない代償を払わざるをえなくなる」

「信念と意志は革命的な組織生活と実践活動を通じてのみ練磨され、不断の教育と自己修養の過程をへてのみ堅固で確実なものになる。このような工程を踏まない信念や意志は砂上の楼閣にひとしい」

「強固な土台に支えられた信念とはどういうものであろうか。それは自分の貴ぶ理念にたいする絶対的な信頼であり、その理念のためであれば餓死、凍死、殴死の覚悟までしている、そういう信念である。言いかえれば自己の偉業の正当性と自分の階級、自国人民の力にたいする確信であり、自らの主体的な力で万難を克服し、革命を最後まで完遂していこうとする覚悟を意味する」

「信念と意志の強い人間ほど、政治的生命の維持では長寿者になる。早々と信念をすてた人間の政治的生命は、非命に夭折してしまう」

「歴史的経験は、革命が上昇一路をたどり情勢が有利なときには、隊伍内に動揺分子や変節漢は出ないが、内外の情勢が複雑に変化し、革命の途上に難関が立ちはだかるときには、隊伍内に思想的混乱と動揺が生じ、投降分子、落伍分子が現れてはかり知れない弊害を及ぼすことを示している」

「わたしの言う思想修養とは、主に信念の培養、楽観主義の培養を意味する。思想鍛錬に励まない人間は逆境に立たされると、すぐ困難に屈してしまうものである。そういう意味で、わたしはいまも思想優先論を主張する」

「自国人民の力を信じようとしない人間は、困難な環境にぶつかると例外なく敗北主義に陥り、敗北主義に陥ればたちどころに革命勝利の信念を失い、闘争を放棄するか、中途半端に終えてしまうのである」

「わが国がいかなる逆風にも揺るがない強国になったのは、わが党の信念が強く、人民の信念が強

いからである。信念の強い党は変質せず、信念の強い国家は崩壊せず、信念の強い人民はくじけないのである」

「人はその利害関係によって革命を促しもすれば、妨げもするものです。人民の利益を第一としてたたかう人の思想はダイヤモンドのように変わることがありませんが、革命の利益や人民の利益など眼中になく一個人の安泰と享楽のみを追求する人の思想はたやすく変質してしまいます。困難な時期に革命をいとも簡単に裏切るのが、ほかならぬ個人主義と利己主義に毒された人間です」

「自分自身と自国人民の力を信じない人の行き着く終着点がほかならぬ事大主義であり、事大主義の導く道は売国と反逆です。事大主義者で祖国と民族を蔑視しない者はなく、祖国と民族を蔑視する者で売国と反逆の道に走らない者がいないということは、これまでの歴史が十分に証言しています」

「目は現実を見ますが、信念は未来を見ます。信

念が崩れれば精神が死に、精神が死ねば人間そのものが無用の長物になります。人間の道徳的信義や良心もすべて信念にその基礎をおいています。信念のない人は良心をもちえず、道徳的信義も守れず、人間としての体面を保つこともできません。人は信念が強ければ自分の人生をりっぱに切り開き、同志のためにも正しく身を処し、党と革命、祖国と人民のためにも真の貢献をすることができます」

「分派的習性に染まった者には例外なく出世欲があります。そういう人は出世の機会に恵まれなければ、他人を後ろ盾にしたり権謀術数を弄してでも、高位職にありつこうとします」

「わたしの体験によれば、信念をもって革命に参加した楽天主義者は、横からどんな風が吹きつけようと動揺しません。たとえ明日は絞首台に立たされようとも、決して動じません。けれども、明確な信念もなしに、みなが革命に身を投じるから自分も加わってみようという気持ちで革命に飛び込んだ人は、いつかは安穏な場所に逃げ込んでしまうものです」

「革命家の人生観や人間としての品格、生活の信条ややり方が他の人間と違う点は、信念や意志、不屈さだけにあるのではありません。革命家にとって大切なのは、誰にもまして理想と抱負が雄大で、いかなる状況にあってもその理想と抱負が実現する未来を確固と楽観することなのです。革命的信念と意志と楽観は革命家の3大特質、革命家の思想的・精神的品格をなす3大要素といえます」

「信念は革命家の生命です。革命勝利の信念はどこから生まれるのでしょうか。それは自己の力を信じることから生まれるのです。自分の指導者への信頼、自分自身の力、自分の属する集団の力、自国人民の力、自分の党の力を確信するときにのみ革命家の信念が守られるのです。

人間は誰でも一定の信念をもって革命の道を踏み出すものです。要はその信念をどれほど長く守るかということですが、それは練磨の度合によって決まります。練磨の過程を十分に経ていない信念は、やがて腐敗し変質してしまいます。信念を練磨する手段となるのは、ほかならぬ組織・思想生活と革命

的実践を通じての政治的・思想的鍛錬です」

「革命家になる前に人間になれというのはすなわち、良心をもった存在、道徳・信義に忠実な存在になれということです。人間は良心をもってこそ道徳もわきまえ、信義も守るようになります。良心をすてた人間には、道徳も信義も犠牲的精神も正義感も誠実さもありえません」

「良心をもつ人間であってこそ革命家になり、良心に錆がつくと信念にも錆がつき、良心にひびが入ると信念にもひびが入り、闘志が麻痺します」

「100日飢えても生きていけるという信念をもった人、ただ1日の誇らしい生のために1000日の苦労もいとわない人、絶海の孤島に残り、名も知れぬ草むらの中に一点の塵となって消えることがあっても、組織が自分を探し、自分の名を記憶してくれるはずだと信じる人、自分を育ててくれた指導者と同志への信義を守るためには、自爆も辞せず、絞首台にもためらうことなく上る意志をもつ人であって

こそ、つねに勝利者となりえるのです。
　革命勝利の信念をつちかう教育、社会主義偉業にたいする信念をつちかう教育は、国状が困難なときほど、より積極的におこなわなければなりません。わたしは信念の強い人を尊敬し大事にします」

「歴史の苦い教訓が示しているように、後継者の表徴で基本となるのは、領袖とその偉業への忠実性であり、道徳・信義であるといえます。領袖への忠実性は、道徳・信義を抜きにしては考えられません。領袖への忠実性と道徳・信義、これは後継者がそなえるべき第一の表徴です。そして、高い資質と指導品格をそなえた実力者であってこそ、領袖の切り開いた革命偉業をその思想と意図どおり輝かしていくことができるのです」

「歴史に名を残した功労ある知識人は例外なく、祖国と民族に忠実な、信念と意志の強い人たちでした。それでわたしはつねに、知識人たちに祖国と民族を熱烈に愛し、いかなる逆境にあっても不屈の意志、革命的信念を貫くよう強調しているのです」

８．信頼と同志愛

「資本家は金儲けが格別の楽しみだというが、わたしにとっては同志を集めることがまたとない楽しみであり、喜びであった。同志一人を得る喜びがどうして一個の金塊を得る喜びにくらべられようか。同志獲得のたたかいは、このように華成義塾時代に第一歩を踏み出したのである。それ以来、わたしは生涯を同志の獲得にささげた」

「人情は時の流れよりも強い力をもっている。時の流れの前ではすべてが色あせ、衰えてしまうが、人情だけは葬り去ることができない。真実の友情や愛には老衰も変質もない」

「それで、わたしはいまも、人を信じるのはよいが、幻想をいだいてはいけないといっている。幻想は非科学的であるので、それにとらわれると、千里眼を誇る人でもとりかえしのつかない失策をしかねないのである」

「革命は同志を得ることからはじまる。
資本家の元手は金であるが、革命家の元手は人間である。資本家が金を元手にして財貨の塔を築いていくとすれば、革命家は同志を元手にして社会を変革し改造していくのである」

「りっぱな人がいると聞けばどこへでも訪ねていって同志を獲得した父の姿は、わたしに人材がすべてを決定するということ、真の同志をどれだけ多く得るかによって革命事業の成否が決まるという真理を悟らせてくれた」

「真実の同志愛は、真の意味での革命を体験せずしては味わえず、弾雨降りそそぐ戦場で生死をともにせずにははぐくむことのできない愛情である」

「金銭や利潤追求の見地からではなく、理念の共通性によって思想的、道義的に結ばれた革命家の集団において、信頼は統一団結と発展を保障する第一の生命といえる。集団の各人は信頼にもとづいて同志を愛し、信頼にもとづいて上級が下級をいたわり、

下級が上級を敬う共産主義的道義が集団を支配するようになるのである」

「資本家は金なしには生きていけないが、共産主義者は信頼なくしては生きていけない。わが国において信頼は社会関係の総体、集団主義の存在方式となっている。組織と同志から自分が信頼されていると思う人は、党と祖国のために底知れない力を発揮することができる。信頼は忠臣を生み不信は逆賊を生むという格言は、このような事理を説いたものではなかろうか」

「戦友の息子は自分の息子で、自分の息子は戦友の息子であるというのが、共産主義的な人間関係なのである。自分が苦しむときは同志も苦しみ、同志が苦しむときは自分も苦しみ、自分がひもじいときは同志もひもじがり、同志がひもじいときは自分もひもじがるのが、まさに共産主義者をこの世でもっとも美しい人間にする倫理道徳である」

「わたしは幼いころから財産の有無や多少によっ

て人を評価しはしなかった。人を評価する基準は、その人が人間をどれほど愛し、人民をどれほど愛し、祖国をどれほど愛しているかということであった。金持であっても祖国を愛し人民を愛する人であればりっぱな人間とみなし、無産者であっても祖国愛と人間愛に欠けていれば下劣な人間とみなした。一言でいって、思想を基本にして人を評価したのである」

「ある人の死が彼との友情の終わりを告げる終幕となるなら、そんな友情をどうして真の友情といえようか。生きている人が故人を忘れなければ、そのことだけでもその友情は生きた友情、生命をもった友情となるのである」

「故人にたいする生者の友情は、先立った人たちの子女にたいする生者の愛情と配慮を通じてもつづくものだといえる」

「強固な同僚関係は実戦のなかでのみ発展し、幾多の試練を克服する過程でのみその真価を測ることができるのである」

「わたしは同志愛を革命家の資質を検証する試金石と見ている。同志愛は、共産主義者をこの世でもっともりっぱな人間たらしめる人格の核心であり、道徳的基礎であり、共産主義者を他の人間と区別する一つの明白な基準である。もしも人間に同志愛というものがなければ、その人生は砂上の楼閣のようにもろく崩れてしまうであろう。同志愛の強い人間にはたとえ欠点があっても、それを容易に直す力がある」

「法の力だけで万事を取り仕切ることはできない。法の不可とするところを代わって果たすのがほかならぬ信義と道徳なのである。

われわれは同志の獲得から革命をはじめ、同志的信義と結束を強め、深く人民のなかに入って彼らとの血縁的な結びつきを強める方法で革命をたえず深化させてきた。いまもそうであるが、以前も同志愛は朝鮮革命の勝敗を左右する生命線であった。朝鮮共産主義者の歩んできた幾十星霜の栄えある闘争の道程は、同志愛と同志的信義の発展の歴史であったといえる」

「地位というものは固定不変ではない。それは下がることもあれば上がることもあるものなのだから、真の同志的関係を保つためには、地位ではなく人間を見るべきである。隣人が苦境に陥ったときは、ふだんよりもっと親身になって助けるべきである」

「不信によって得られるものはなくても、信頼によっては多くのものを得ることができます」

「革命が困難な局面を経るときこそ、人への幻想は徹底的に排撃すべきです。人を信頼し愛するのはよいことですが、幻想をもって接するのはよくありません。思想というものは固定不変のものではありません。昨日、今日、明日と変わりうるのが人の心です」

「苦労のあとの対面であるほど、その喜びは大きいものであるようです。同志がどれほど大事であるかを知るためには、別離も体験してみる必要があります。血を分けあった同志が別離と対面を繰り返す過程で、同志愛はいっそうかたく熱烈なものになる

ものです。そういう同志愛はいかなる風波が荒れようとも容易に崩れ去るものではありません」

「わたしは革命の過程で多くのことを体験しましたが、そのなかでもいちばん胸深く刻みつけたことの一つは同志についての体験です。人民の自由と解放のために決死の覚悟で革命の道に投じた人にとってもっとも貴いのは同志であり、同志愛です。真の同志は第二の『わたし』だといえます。『わたし』は、『わたし』を裏切らないものです。それほど忠実で信義に徹した同志が団結すれば、天にも勝てるものです。それでわたしはつねに、同志を得れば天下を得、同志を失えば天下を失うと言っているのです。

同志という言葉は志を同じくするという意味ですが、志はすなわち思想です。一時的な利害や打算によって結ばれた同志の関係は強固でありえず、ときによって簡単にこわれてしまいます。しかし、思想、意志のうえで結ばれた同志の関係は永遠であり、そのような同志の関係は銃弾によっても、断頭台によっても断ち切ることができません」

「親子間の愛、夫婦間の愛、恋人同士の愛、師弟間の愛、同志間の愛をはじめ人間生活に存在する愛において大切なのは、献身性であると思います。自分は飢え、寒さにふるえ、病気にかかっても愛する人にはそうさせまいと、必要であれば火中に身を投げ、刑具の前に進み出、氷の穴にも飛び込む、自己犠牲的な献身性のみが、もっとも美しく気高い真実の愛を創造することができるのです」

「戦友愛とは生命力の強い愛です。戦友愛が生命力の強い愛となるのは、それが硝煙のなかで磨かれた愛であり、同志に代わって炎のなかにも飛び込み、死ぬこともできる愛であるからです。

人間が信義に忠実であるのはなんと美しいことではありませんか。信義ゆえに人間は気高い存在となり、信義ゆえに人間生活は百花咲き乱れる花園のように美しくなるのです」

「わたしは14歳のときに母の膝元を離れて以来、ずっと人民と同志のなかで暮らしてきました。抗日革命の日々にも、新しい祖国建設の日々にも、祖国

解放戦争の日々にも、同志たちは終始一貫、わたしを誠心誠意助け、守ってくれました。盾となって敵弾を防ぎ、雪や雨、病魔も防いでくれました。気苦労をするときも、同志と人民が力になってくれました。わたしも力が尽きたり辛いことがあるときは、まず同志と人民を訪ねました。彼らがいれば、力も湧き、前途も明るくなり、いかに困難なことでも十分やりとげられるという自信も生まれました」

「抗日革命の全過程は、人民大衆を歴史の主体とみて彼らを意識化、組織化し、祖国解放のたたかいの第一線に立たせた愛と信頼の歴史であり、人民大衆自身が自らの血と汗によって、歴史のりっぱな主体であることを誇示した、偉大な闘争と創造の歴史です。この人民と人民革命軍の闘士たちこそ、新しい祖国の建設を担当すべき朝鮮革命の主体でした。人民の愛と支持のなかで、人民の力を信じ、人民に依拠してたたかうとき、いかにきびしい試練をも克服し、いかに困難なたたかいでも勝利するというのは、われわれが抗日革命の炎のなかで得た貴重な真理なのです」

９．伝統と継承

「夢もなく、胆力もなく、情熱も、覇気も、闘志も、ロマンもない青春は青春ではない。若いころは高遠な理想をかかげ、その実現をめざし万難を排して頑強にたたかわなくてはならない。清新な思想と健全な肉体をもった青春の血と汗によってもたらされたすべての実りは、祖国の貴い富となるのであり、その富をもたらした主人公を人民は永遠に忘れないであろう」

「たとえ同じ血筋を引いた子孫であっても、烈士の偉業をおのずと継承するものではない。烈士の闘争業績をよく知り、それを心から貴ぶ子孫であってこそ、父や祖父の世代が切り開いた革命偉業をしっかりと継承していけるのである」

「子どもたちと親しむのは、生活における大きな楽しみである。子どもたちの笑顔は、心の痛みや悩みを洗い流す強力な洗剤だともいえる。彼らの童心

世界に入りこんでみたまえ。すると生への強い衝動を覚えるであろう。そして子どもたちがいるために、人類の生活はますます美しく彩られ、彼らの瞳にみちあふれている理想を花咲かせ、守るのが、神聖な使命であることを胸いっぱいに感じるであろう」

「今日も、朝鮮革命は社労青とともに少年団を労働党の有力な貯水池とみなしている。われわれが全国の財宝を集めて子どもたちの宮殿を建て、次代の教育に惜しみなく投資しているのはそのためである。

それで、わたしはいまも幹部たちに向かって、若い世代を愛するようにといい、子どもたちを国の『王様』だと再三強調している。未来を愛さない革命、未来をはぐくまない革命は、前途の暗い革命である。そのような革命がなにかりっぱな理想を達成するであろうと考えるのは、愚かしいことである」

「わたしはつねに、青年を革命の前衛とみなした。青年は革命闘争と社会的運動においてもっとも困難な部門をになって立つ先鋒隊であり、主力部隊であり、未来の運命までになう根幹部隊である」

「涙は、自分を愛するか愛することのできる人たちへの子どもの精一杯の訴えである。人びとがその涙に胸をしめつけられ、耳を傾けるのは、子どもを慈しみ見守るのが人間の本性のうちでももっとも基礎的な本性であるからである」

「子どもは階級の花であり、民族の花、人類の花である。この花をりっぱに育てるのは共産主義者の神聖な任務である。子どもをどう育てるかによって革命の未来が決まるのだ。革命は一世代で終わるものではなく、幾世代にもわたって完成されるものだ。今日はわれわれが革命の主人となっているが、明日はあの子たちが成長して革命をになっていく主力部隊になるのだ。したがって、われわれが朝鮮革命に忠実であるためには、革命の血筋を受け継ぐ後続部隊をしっかり育てなければならない」

「子どもへの愛情は人間の愛情のうちでももっとも献身的かつ積極的な愛情であり、人類にささげられる頌歌のうちでももっとも純潔で美しい頌歌である」

「歴史は墨で塗りつぶせるものでもなければ、火で焼き捨てたり、剣で切り捨てたりできるものでもない。誰がなんと言おうと、われわれの歴史は歴史としてありつづけるであろう」

「人はよく、りっぱな親をもつ子は、その薫陶よろしきを得て有用な人材になると言います。もっともな話です。同じように、親もりっぱな子をもてば、啓蒙され目覚めます。そして、わが子に歩調を合わせるようになります。こういう理由で、家庭の革命化における若い世代の役割がきわめて重要であることをわたしはいつも強調しているのです」

「革命家たらんとするなら、親の影響も重要ですが、自らの努力が必要です。夢にも先祖の恩恵をこうむろうなどと考えてはなりません」

「若い世代が多くの仕事をして大いに力を養ってこそ、祖国が富強になり、人民が高い尊厳と自負を抱くようになります。尊厳というものは天から降ってくるものではありません。党が偉大であり、領

袖が偉大であり、国が富強であってこそ尊厳というものも生まれ、自負も強くなるものです。若い世代が主力となって党と領袖をりっぱに支え、仕事に励んで富強な祖国を建設しなければなりません」

「金正日同志を白頭山の息子というのは、抗日革命の申し子であるということであり、民族の息子であるということです。彼は抗日革命闘士のふところで人生の第一歩を踏み出し、そのふところで朝鮮革命の嚮導星として登場した朝鮮の息子です」

「領袖の偉業の継承、完成において重要なのはまた、後継者の指導に忠実にしたがう中核の育成、後続隊の育成です。中核をかため後続隊をりっぱに育成しなければ、後継者の指導体系を確立することも、その路線と方針を貫くこともできません」

「金正日同志を民族の指導者に育てたのは白頭山です。白頭山の闘士が彼を嚮導星におし立て、白頭山の精気が彼の気概となったのです」

生の座右の銘

発行所　　朝鮮民主主義人民共和国
外国文出版社
発　行　　チュチェ107(2018)年10月

E-mail：flph＠star-co.net.kp
http：//www.korean-books.com.kp